

「大型花蕾」で効率化

国産化推進へ 生産技術の普及を

農研機構

農研機構は、加工・業務用ブロッコリーの「大型花蕾生産技術」により、労働生産性が向上したという栽培試験の結果を公表した。あわせて、同技術の作業手順をまとめた「ブロッコリー大型花蕾生産技術標準作業手順書（SOP）」も公開。農研機構では、同技術の全国的な普及により、輸入に依存している加工・業務用ブロッコリーの国産化が進み、国内農業の振興や食料自給率の向上につながることを期待する。

ブロッコリーは、加工・業務用で価格の安い輸入冷凍品への依存が大きいのが課題。そのため、国産化の推進には大幅な生産コストの削減が必要だ。

加工・業務用は、小房状に分けた「フロレック」の形で利用されており、農研機構では大型化に適した品種を用いて花蕾を大型化し、フロレックの収量を増加させる「大型花蕾生産技術」を提唱。全国的に普及させるためには、各産地に適した品種の選定や、経済性の評価が必要なことから、栽培試験を実施。

が、慣行の青果用栽培と比べて総労働時間が128時間から61時間に半減した一方、出荷量は19%増加。労働生産性は1時間当たり7・3キから19・7キへと向上し、所得換算では輸入品と同水準の販売価格であっても1時間当たり1159円から1689円に増加した。これにより、「輸入品に對抗できる労働生産性の向上が実現可能であることが示された」という。

また、同技術と、大小混み玉による一斉収穫を組み合わせた実証では、収穫時期の見極めが難しく増収効果は限定的だった。さらに、実際の物流を

通じた出荷・貯蔵による日持ち性も検証。6月10月に長野県で収穫した大型花蕾をスチロールボックスに水詰めし、約3日かけて冷蔵トラックで神奈川県に輸送。その後5℃の冷蔵庫で貯蔵した結果、収穫後12日間以上にわたり可販品質が保持され、夏秋作期に収穫された花蕾でも、倉庫到着後1週間以上という実用上求められる日持ち性を十分に備えていることが実証された。

「ブロッコリー大型花蕾生産技術標準作業手順書（SOP）」の閲覧は <https://sop.naro.go.jp/document/detail/196> か。

そこで、秋作から春作にかけての産地（神奈川県、兵庫県、広島県、香川県、愛媛県、熊本県）

では合計25品種、夏作産地（長野県）では合計23品種で、各地に適した品種や収量性を調査した。

秋・春作では「グランドーム」「クリア」「こんばんは」、夏作では「SK9-099」などで高収量が得られた。適切な品種を栽培することで、7県すべてで全国平均の3倍以上となるフロレック収量（10キ当たり2100キ以上）が確認された。ただし、慣行的な栽培と比べて栽培期間が

延びる傾向があり、長野県の夏とり作型では約1週間の延長が必要だった。

また、同技術と、大小混み玉による一斉収穫を組み合わせた実証では、収穫時期の見極めが難しく増収効果は限定的だった。